

# ドービニエの自伝をめぐって

——アンボワーズ陰謀事件——

高 橋 薫

アグリッパ・ドービニエ Agrippa d'Aubigné の自伝『児らに語る Sa vie à ses enfants』をひもといてみればすぐと判ることだが<sup>1)</sup>、この宗教者の幼年期に関して知り得ることは極めて少ない。レオーム版の全集でわずか二頁弱の文章が、その全てである。そこに語られているのは、出自、生誕にともなう母の死と父の再婚、早期からの古典語教育、白衣を着た女性の幻視体験、及びアンボワーズ陰謀事件の印象の五項目である。これらの項目はドービニエの伝記を叙述する場合、ほとんど必ず要約され、あるいは敷衍されとりいれられている。宗教者・文学者としてのドービニエの形成を尋ねる者は、中でも、後の三項目に源泉を求める傾向にある<sup>2)</sup>。即ち、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の素養とルネサンス人との関係、幻視体験とその詩の幻想性との関係、及びアンボワーズ陰謀事件と新教闘士との関係である。これらの項目はドービニエを理解するうえで必須のものと考えることができるし、理論的にどの項目が、精神形成に於いて優位を占めるといえるものでもあるまい。にもかかわらず、本稿でアンボワーズ陰謀事件をとりあげるのは、自伝の中でこの事件にまつわる出来事が、他の項目と比較して十分な量を有しているからである。つまり本稿の問題となるのは幼年期の事件のドービニエに及ぼした影響ではなくして、ドービニエが自伝を語ったその時点で、諸事件がドービニエの内部にどのような位置を占めていたか、である。

\*

アンボワーズ陰謀事件そのものは、宗教戦争史上著名な出来事であり、本稿で詳論すべきものではないだろう<sup>3)</sup>。概略を言えば、アンリ二世 Henri II の新教徒断圧政策を受け継ぐギーズ家 Les Guise の手から幼王フランソワ二世 Francois II を奪い、政策を改めさせようとした新教貴族、あるいはギーズ家の隆盛に反感を抱くブルボン家 Les Bourbon を頂点とする不平分子達の行動と、それを事前に知らされたギーズ家の陰謀加担者の断圧がこの事件である。16世紀後半から17世紀前半にかけての数多の宗教戦争の、いわば予見的な事件であり、歴史家のとりあげること大である許りでなく、当時の戦記や回想録にも、基礎的な事件として引用されてもいる。断圧の結果多くの新教徒が虐殺された。ドービニェの自伝の記事はアンボワーズ陰謀事件の経緯にも複雑な背景にも触れていない。虐殺の直後パリを訪れた父ジャン・ドービニェ Jean d'Aubigné と息子アグリッパの、強烈な印象が、浮きあがるように語られている。

「8歳半の頃、父はその子をパリに連れていった。市の立つ日、アンボワーズを通った時、絞首台の端にまだ誰か見分けられるアンボワーズの同志たちの首を認め、大層衝撃を受け、七千から八千もの人々の間でこう叫んだ、「彼等はフランスの首をはねたのだ、死刑執行人どもは」と。そして息子は、父の顔に常ならぬ心の動きをみて、父の傍に馬をよせると、父は子の頭に手を置いてこう言った、「わが子よ、栄光に満ちたこれらの頭領の復讐をするために、私の首に続いておまえの首が惜しまれてはならない。もしおまえが惜しむなら、おまえは私の呪いを受けるだろう (tu auras ma malediction)」と」<sup>4)</sup>

\*

既に述べたように、この記述はドービニェの後年の諸作品にあらわれる激しい新教擁護の筆や、戦時にあつての闘士としての生活に関係づけられ、父の言葉がそれらに重要な契機を与えたと考えられている。ところでドービニェ研究がようやく始められた19世紀後半からの研究書を幾つか手にとってみると、興味深い事実が見つかる。父の言葉の形容に関してである。

《これはハンニバルの今ひとつの誓約のようであった》<sup>5)</sup>

《父が彼に誓わせたこの有名なハンニバルの誓約》<sup>6)</sup>

《アグリッパは、そのハンニバルの誓約を表明した》<sup>7)</sup>

「ハンニバルの誓約」との言葉がそれであり、例はこれだけに尽きるものではない<sup>8)</sup>。もっとも近年の研究書にはこの形容は殊更のように避けられている。実証性のない言葉を探るまいというのだろうが、この形容は果たして全く正当性を欠いた修飾であろうか。

古典古代がひとつの理念であったユマニスムの時代にあって、ハンニバルの名も数多く引用される。ある者はその偉大さを称え、ある者は政略、戦術を論ずる。ドービニェのハンニバル観も、あるいは新教徒として典型的なものであったかも知れない。レオーム版の全集でドービニェは少なくとも二度、ハンニバルの名を用いている。一度は『内乱論 *Traité sur les guerres civiles*』であり<sup>9)</sup>、これは問題にすべき点を有していない。関心をひくのはその生涯の著作『悲愴曲 *Les Tragiques*』の巻頭の一節である。

《Puisqu'il faut s'attaquer aux legions de Rome,  
Aux monstres d'Italie, il faudra faire comme  
Hannibal, qui par feux d'aigre humeur arrosez  
Se fendit un passage aux Alpes embrasez》<sup>10)</sup>

ここで見なければならぬのはドービニェとハンニバルとの一体化である。ジャック・ベルベ Jacques Bailbé は繰り返しドービニェがハンニバルやカエサル<sup>11)</sup>の行動と自分のそれを比較していたと語る。ベルベの断言の根拠が正確にはどこにあるか、定かではないが、ハンニバルの場合そのひとつにこの『悲愴曲』の冒頭の一節があるのは間違いない。一体化は全く図式的である。ハンニバルはローマ共和国に対抗し、自国カルタゴの自立を守ろうとした英雄である。ドービニェにあってイタリア・ローマは二重に敵となる。ひとつには旧教の総本山、反キリストの棲む所であるがゆえに、またフランスの支配権を握る

異国人の出身地であるがゆえに。従ってドービニェはハンニバルの如く振舞わねばならぬと語るのだ。この図式が新教徒一般にどれほど生きていたか判らないが、ともあれドービニェには有効であった筈である。でなければ構想 40 年の『悲愴曲』の冒頭を上記の一節で始める訳はあるまい。この点でドービニェと英雄ハンニバルの一体化は明確である。ハンニバルが冷酷であろうと残虐であろうとどうでもよい。彼はローマに対し、幾度も徹底的な勝利をおさめたのである。

さて、ドービニェとハンニバルとの一体化が見られるのは、この点に於いてばかりであるのか。「ハンニバルの誓約」もここに関わりはしないか。ポリュビオスによれば、晩年ハンニバルはその幼年期の回想をもらしたことがある。

《彼は次のように語った。彼の父が軍隊を連れてイベリアに行こうとした時、彼は 9 歳であったが、神に捧げものを父がしている祭壇の傍に立っていた。吉兆を得て酒を注ぎ、儀式にのっとった全てを遂行し終えた時、父は供犠に立ち会っていた者たちにしばらく遠去かっているよう命じた。そして父は息子を呼び、情をこめて、自分と共に遠征に出発したくないかどうか尋ねた。ハンニバルは喜んで同意し、子供っぽく懇願しさえした。父は、子の手をとり、祭壇の側に導いて、犠牲のうえに右手を置いて、断じてローマ人の友とならぬことを息子に誓わせた》<sup>12)</sup>

ティトウス＝リヴィウスも類似の記事をのせているが、《ローマ人の敵たることを》誓わせた<sup>13)</sup>、こちらの表現はいささか強くなっている。実際にハンニバルがこのような誓いをしたか否か、疑問は残るが、ともかくこれが 19 世紀後半からのドービニェ研究の先達の典拠であろう。そしてこの比較は無理からぬものと思える。年齢のうえからもドービニェは 8 歳の半ば、ハンニバルは 9 歳と近いし、ローマとの敵対関係も相応する。更に、試みに『悲愴曲』に登場する神話上もしくは歴史上の著名な名を調べ、判明する範囲での伝説を調べても、この場合のハンニバルとドービニェ以上に類似する幼年期の誓言伝説をもつ者は、どうも見当たらないように思える<sup>14)</sup>。だが、この類似は、諸研究者に

形容語のもっともらしさを与えるだけにとどまるものであるのか。ドービニエ自身、自伝に見られる誓言の記事と、ハンニバルの誓言伝説の類似を意識していはしなかったか。実証性に欠けるこの仮定は、だが、ドービニエのハンニバル観を知る以上それなりの説得力を持ちはしないだろうか。

\*

ハンニバルとドービニエの誓言伝説は確かに類似していよう。しかし同一人物、同一状況でない以上相異点があるのも明白である。背景を除いて、眼にとまる最大のものは、ドービニエの場合、はっきりと「呪い」という言葉が著されている点である。無論ハンニバルにしたところで、誓いが神前で為されている限り、その誓いに背けば、何らかの神罰がハンニバルの頭上に下されるであろうことは前提となっている筈だ。けれど暗黙の了解としてあるものと、それを明言するものと、事態は余程異なっているように思える。誓いの中にはそれを破る場合の結果が含まれているものであって、その了解を越えて敢えて「呪い」なる言葉が表現されるのは、父との関係であるだけに、異様な印象を受けずにはおられない。

呪いとは何か。如何なる宗教にも呪いはつきものだと考えられるが、先ず以ってキリスト教の文脈の中で把えることが肝要である。レオン=デュフェール編の『聖書思想事典<sup>15)</sup>』によれば、呪いとは、

「人間を超越する計りしれない力とかかわりをもたせ、ひとたび口から発した呪いの言葉は、おのずとふきつな結果を生じさせるものと考えられる。人はこのようにして、悪と罪の恐るべき力をよび起こし、呪われた者は必然的に悪から不幸へと導かれる」

としている。呪いには超自然的な力が関与し、その力によって呪う者は呪われる者を不幸に陥ろうとする。正統キリスト教にあって超自然の力とは神そのものであり、呪いの例は聖書に幾つも見出すことが出来る。

「カナンはのろわれよ。  
彼はしもべのしもべとなって、  
その兄弟たちに仕える。」(創世記第9章)

父ジャンが息子アグリッパに告げたのは、まさにこのようなことであった。息子が父との誓いを破るならば、父は息子の不幸を神に願うであろう。だがそれにしてもこの父と息子の関係は異常な緊張感を与える。表現にしてもそうである。聖書によく見られ、ドービニエ自身も用いる受動態的表現、たとえば「おまえは呪われるであろう」とは言わず、「おまえは私の呪いを受けるであろう」と言うのだ。この文脈の中で「私の」という所有形容詞は極めて強く、極めて意志的に響く。父と息子との関係を考え合わせればますます、呪う者の主体の自己主張がうかがえるのである。何故ジャンとアグリッパはこのような関係において把えられるのか。

近年ジルベール・デュボワ Gilbert Dubois は『悲愴曲に於ける親族のイメージ Les images de parenté dans «les Tragiques»』と題する論文を発表し、その中で父のイメージについても一節をもうけている。

「父」の主題は『悲愴曲』に於いて正義の理念と結びつけられ、従って「法」の化肉となる。この意味で「父」は超自我の決定機関としての役割を演ずる……」

「父」の主題は、その重要性によって、16世紀プロテスタントのしるしである。神に適用された父のイメージは明確に超自我の特長をまとうっており、神の超越を強調する、カルヴァン派のイデオロギーと詩との関係を証明するものなのである」<sup>17)</sup>

デュボワの言を信ずれば、父のイメージはドービニエにあって、更に新教思想にあって超自我的な機能を媒介に神と結びついているという。だがこのデュボ

ワの分析が基いているのは『悲愴曲』であり、他の作品、特に青年期の作品に於いて事情は異なっているように思える。

青年期の作品とここでいうのは、詩集『春 Les Printemps』を指す。ディアンヌ・サルヴィアティ Diane Salviati との恋愛が主題の、「ディアンヌへの犠牲 L'Hécatombe à Diane」、*「スタンス Stances」*及び「オード Odes」から成立する三部構成の詩集だが、ここにあらわれる父のイメージを調べると、それが稀薄であることに驚くばかりである。使用回数も多くはない。たとえば「序詩」では、父という言葉は族長たちというほどの意味の複数形で用いられたり<sup>18)</sup>、詩集を自分の子にみたと、それによって自らを「おまえの父」と称する態<sup>19)</sup>の、修辭的なものである。第一部のソネ LXVII の場合は、

«Docteurs, qui annoncez que nos espritz ont eu  
Entrant dedans leurs corps, de la main de leur pere  
Le choix du bon, pour voir et fuir le contraire,  
Et que l'arbitre franc du ciel ilz ont receu»<sup>20)</sup>

の一節に父という言葉があるが、このイメージは明らかに造物主を指すと思える。けれどこの単語が大文字で書かれていないことは注目に値する。あるいはまたオード XXXVIII に用いられる単語の場合も<sup>21)</sup>、ジョデル Jodelle をその作品の父にみたとてのもので、これまた修辭上のものに過ぎない。大体この青年期の詩集に於いて異端というよりむしろ異教的なイメージが背景となっており、「神」なる言葉さえ単数形で、かつ大文字で書かれているのを見る時、意外の念を覚える程である。従ってこの詩集を見る限り、「父」のイメージは『悲愴曲』のものとは遥かに違い、このイメージの欠除を告げても間違いないと考えられる。では何故このような変化が生じたのか。

デュボワの語った超自我の概念を媒介にしてひとつの答が得られよう。フロイトは『続精神分析入門』で、超自我の3つの機能を、自己観察、良心、理想形成としてあげ、その発生を父親との密接な関係のうちに求める<sup>22)</sup>。初期フロムはこれを展開して次のように語っている。

「社会の中で働いている外部的な権力は、家族の中で大きくなる子供に、両親という姿で、また家父長的な小家族では、とくに父親という姿で、のしかかってくる。父親との同一視と父親の命令ならびに禁止の内化によって、法廷としての超自我は、道徳と権力という属性でおおわれる」<sup>23)</sup>

だが子と父の関係は、こうして形成された超自我がそのまま確定的に子の性格を決定するほど容易なものではない。この場合父は子に自己の肯定的なイメージを押しつけるが、一方では超自我の基本であるが必ずしもその形成に直結するとは限らない父と子の利害が対立するエディプス・コンプレックスの存在も忘れてはなるまい。更にフロムの語るのは近代的で且つモデルとなり得る家族である。ジャンとアグリッパの場合は先ず時代に於いて、次いで特殊性に於いてこれと異なっている。アグリッパの幼年期の年譜を追えば事態は明らかである。アグリッパはその生誕とひきかえに母を失なっている。翌年ジャンはアンヌ・ド・リミュール Anne de Limur と再婚し、アグリッパはその従姉のミシェル・ジョリ Michelle Joly の許に預けられ、ポンスの近くやアルシアックにある城で 1559 年まで生活するのである。必ずしもジャンとの別居が再婚のゆえと考える必要はないかもしれない<sup>24)</sup>。モンテーニュ Montaigne も経験したように<sup>25)</sup>、貴族の間で実子を幼年期の間里子に出す風習が存在したからである。このような父と子の関わりはどれほど強いものだったのか。確かに 1563 年ジャンは傷を受けて死に、その際にアンボワーズの誓言を忘れないようドービニェに告げたいらしい。ドービニェは死んだ父に大層涙したとも書いている<sup>26)</sup>。自伝によれば打ち続く宗教戦争の中でドービニェの参加はひどく積極的なものであった。けれど新教徒としての理念はどこまで燃え続けていたか。ディアンヌとの恋愛事件がある。ドービニェはアンリ・ド・ナヴァール Henri de Navarre と共に宮廷生活を送る。そして 1574 年には旧教徒の軍勢に混じって戦いさえするのである<sup>27)</sup>。

ひとつの答とはこのような状況からもたらされる。父のイメージは事実強烈であったかもしれない。だが無意識に対立するものでもあったろう。自我が完成に近づくや、父のイメージ、超自我の機能形成の役割は影に隠れてしまう。



然しある体験を機に<sup>29)</sup>隠れていた父のイメージが、新教への再回宗とあいまって姿をあらわす。父と神と超自我の三者の図式の中で、ドービニエは父を取り戻す。かくて一度は『春』に於ける如く稀薄になった父のイメージが、デュボワの描いたように、『悲愴曲』では超越的に世界をおおってしまうのだ。この答は十分に成立可能であろう。だが解釈の可能性は果たしてそれだけなのだろうか。

\*

『児らに語る』と題された自伝は何のために書かれたか。ドービニエは自伝の序文で一応はその目的を述べている。コンスタン Constant, マリー Marie 及びルイズ Louise の3人の子供たちに、ドービニエは、偉大な人物よりも平凡な人間に例をとって生き方を学んだ方がよい、と言い、次のように続ける。

「以下が父親としての親しみをこめて語る私の生涯の物語である。その親しみのゆえに、『世界史』にあって趣味が悪いと思われた事柄を隠し立てすることはなかった。それ故に、おまえたちに、私の栄光についても、私の過ちについても顔を赤らめることなく、まだおまえたちを膝のうえにのせているかのように、それぞれを語るものである。私が願うのは、私の幸運な、あるいは名誉ある行為が、おまえたちに、羨望の念なくして、競争心を与えることだが、それは、おまえたちに最も多くの収穫を与える点として、わたしが赤裸に示す過ちに、より意識的に気を配るという条件で、である」<sup>29)</sup>

自伝中にもしばし『世界史 Histoire universelle』への言及があらわれるが、自伝は〈世界史〉を生きた人間の個人史、個人的な回想である。客観的に把握された同時代史の中のドービニエ自身の生き様の回想である。ドービニエは子どもたちに自らの生き方より学べと言っている。否、より正確に言えば、自己のように生きよと、おそらく言っているのだ。この序文はただ単に父親が年端のゆかぬ子供たちに生き方を教えているのではない。この自伝の書かれた時期は明確でなく、かなり長期に渡って書かれたと推測されるが<sup>30)</sup>、『世界史』への

言及からみて少なくとも 1618 年以降のものと考えてることが出来よう。自伝の序文がまさにその初期に著されたものとしても、この時既に二人の娘は結婚生活を何年も経ており、とりわけ息子コンスタンはパリで華やかな生活を送り、あまつさえカトリックに回宗し、乱行の限りを尽くしているのだ。こうした背景を考えると、どうにもドービニエの序文は空々しいものに聞こえる。老境をひかえた老人の、これは呆けてしまった頭脳で考えられたものなのか。特に若年時の出来事に関する錯誤や誇張の数々<sup>31)</sup>をとりあげれば、思考力の減退を想定し得るかもしれない。だが、実のところドービニエが年齢ゆえに呆けてしまったとは、最もありそうにないことである。ドービニエの散文作品で最も生彩あるもののひとつ、『フェネスト男爵の冒険 Les Aventures du Baron de Fæneste』の第四之書が出版されたのは、ドービニエの死のほぼ一月前、78 歳の春ではなかったか。従って序文にはやはりそれなりの意味を求めなければならないのだ。

基本的に言って、ドービニエの過ちとは何か。生涯を通じて厳格な新教徒であり続けなかったことである。ドービニエの幸運な、あるいは名誉ある行為とは、逆に、過ちにもかかわらずすぐれた新教闘士と再び成り得たことである。これらの過ちと名誉ある行為を子供たちは学ばねばならない。自伝の序文は従って、年端のゆかぬ子供たちに将来の理念的人間像を説いているのではない。過ちの只中にある、もしくは犯すであろう子供たちに、その過ちから脱け出すように勧告しているのだ。三人の成人した子供たちに敢えて序文を捧げたのは、おそらくこの理由以外のものを有しはすまい。即ち、自伝にはすぐれて教育的な意図が含まれているのである。ここでアンボワーズ陰謀事件の物語は別の様相を呈すかに見える。

この事件によってドービニエは、新教の闘士たることをきびしく誓わされた。ある時期この誓いにそぐわない行動をとったものの、ドービニエは結局カトリックの敵たることを自らに課した。コンスタンもきびしく育てられ、その教育に反して、あるいはそれゆえに新教を裏切った。今度はコンスタンが正道に戻らねばならない。父と子の関係は子と孫の関係になるべきなのだ。だがこの推定は正しいか。もしや子と孫の関係が父と子の関係になるべきではないの

か。つまり、子と孫の関係が先ず問題であって、その解が父と子との関係とは言えないか。自伝には教育的配慮がみられると述べたが、この教育的配慮は、もしや事実に先立つものではないか。

時として一般の史書にも引用されるドービニエの誓言伝説<sup>32)</sup>の事実性を証するものは、実のところ本人の言葉しかないのだ。ジャンもあるいは周囲にいてこの言葉を聞いたかもしれぬ人々も記録を残していない。ジャンとドービニエとの間にある程度の対話はあったろう。だがそれは自伝の記述にどれだけ近いものなのか。

疑えば勿論きりが無いが、表現上の問題を挙げてみよう。この誓言伝説はどうも削り取られ過ぎている印象を与えずにはおかない。既に説明した背景のどれなりととりあげてはいないし、解釈も述べてはいない。きれいに誓言伝説だけが浮きあがっている<sup>33)</sup>。ドービニエが体験したことのみを語っているからだ、とも考えられよう。白衣を着た女性の幻視体験もそうである、と。だがアンボワーズ陰謀事件はフランス新教史上重要な事件なのだ。この事件に続く第一次宗教戦争に関しては、一応はその原因を述べ、そしてその結果生じた個人的な事態を語っているドービニエなのである<sup>34)</sup>。

デュボワが説明した父のイメージと神及び超自我の図式もこう考えると充分ではなくなる。再び初期フロムを援用すれば、超自我は必ずしも幼児体験のみにより決定されるものではない。

《超自我対権威の関係は、弁証法的である。超自我は権威の内化であり、権威は、超自我の性質が自分（権威）に投射されて聖化され、この聖化された姿で、再び内化される……それゆえ、超自我は、（人間が生きている社会がどんなものであっても）、幼児期にひとたび形成され、それ以来人間の中でずっと働く法廷ではない》<sup>35)</sup>

フロムは、幼児期の権威が決定的なものでない限り、他の外的権威が超自我の形成に与える場合もある、と言うのである。このフロムの説を採れば、デュボワの図式は逆転し得よう。つまり新教、とりわけカルヴァン主義という《権威

主義的》<sup>36)</sup>宗教を強く引き受けたドービニェには、その神が超自我のよりどころとなる。そして超自我が過去に投影され、過去の超自我のひとつの形成者<sup>37)</sup>であった父に結びつけられる時、父は現在の権威のイメージの影響を受ける。事実としての父ではなく、ありうべきであった父のイメージが結ばれるのである。こうした過程が存在し得るとすれば、無意識の操作による公算が大である。そして無意識による父の像の権威化が、後からのものにせよ、ドービニェの語っている現在と、語られている過去の間の過程を通じて確立されてしまえば、あるいは意識的でもあり得た意図は表面化せずともその過程の中に流れ込み得るだろう。

ドービニェの自伝が教育的配慮をも有していると述べた時、その配慮は十分に意識的なものであった。けれどもその配慮が事実を変型するまでに強いものであったか否かは、実のところ余り問題ではない。意識に昇る配慮が強かろうと弱かろうと、無意識の過程がその配慮に味方すれば、それは自然なものとして意識されるだろう。アンボワーズ陰謀事件がある。そこに登場する父は、事実の父ではなく、理念によって権威化された父である。またハンニバル伝説がある。既に示したようにドービニェはハンニバルとの一体化を強く望んでいた。である以上、ハンニバルの行為はひとつのモデルとなり得る。権威化された父のイメージを通して、自伝のひとつの目的とも考えられる教育的配慮が過去に流れ込んでゆく。このような場合、権威化された父によって既に変型を受けてしまったアンボワーズ陰謀事件の事実と、ハンニバルの誓言伝説との差が見落されては何故いけないうか、変型の操作の只中で、著名なハンニバル伝説がひとつの鋳型を与えるとは、あり得ないことか。

今迄述べて来た推測に基く一応の結論はこうである。原型としてのアンボワーズ陰謀事件は、自伝を語るドービニェの現在の、意識と無意識の影響を受け、ハンニバル伝説に基く、説話として理念的な存在に変型してしまったのだ。

この結論は、繰り返す事だが、全くの仮説であって、事実はより単純にドービニェの誇張癖<sup>38)</sup>に依存するものかもしれない。然し、現在までのドービニェ研究は、個人にかかわる事柄、実証不可能な事柄はそのまま自伝の記事を信頼する形で為されている。ドービニェはひとつの強烈な自我である。意識的に

も、無意識的にもそうであったろう。このような個人の著すものを事実そのものと認めることは重大な過ちを犯すものではあるまいか。本稿で述べた推測が、全くの誤解であるにしても、ドービニエ研究の、所謂実証的側面は、今一度問い直されるべきであるように思われる。アンボワーズ陰謀事件にしても、あるいは自伝全体を通じて、である。

註

- 1) 使用したテキストは, Agrippa d'Aubigné : Sa vie à ses enfants, in Œuvres complètes, édition par E. Réaume et de Caussade, Slatkine Reprints, Genève, 1967, (以下 O.C. と略す) t. 1 である。その他 Œuvres d'Agrippa d'Aubigné, édition par H. Weber, Bibliothèque de la Pléiade, 1969 (以下 O.E. と略す) を適宜参照した。近代のものでも自伝には幾つかの版があるが、自伝そのものの校訂に関わる訳ではないので、最も基本的と思われる上記の版以外には言及しない。
- 2) 勿論これは一般的傾向であって、各研究者に応じ、比重は異なる、たとえば McFarlane は、古典語教育にも行数をさきつつも、最後の二項目を特に重視している。cf. Introduction, in les Tragiques, édition par I.D. Mcfarlane, Athlone Press, 1970, p. 1
- 3) アンボワーズ陰謀事件に関しては次の書を主に参考にした。  
Dictionnaire historique de la France, édition par Ludovic Lalanne, Slatkine Reprints, 1977  
L. Batiffol, Le Siècle de la Renaissance, Hachette, 1909  
Louis-Raymond Lefèvre, Le Tumulte d'Amboise, Gallimard, 1949  
Georges Livet, Les Guerres de Religion, P.U.F., "Que sais-je",  
(リヴェ 『宗教戦争』, 二宮・関根訳, 白水社, 文庫クセジュ)  
渡辺一夫「世間噺・戦国の公妃」, 『渡辺一夫著作集 13』所収, 筑摩書房, 1977年。
- 4) O.C., t. I, p. 6
- 5) M.A. Postansque, Théodore-Agrippa d'Aubigné, Montpellier, Jean Martel, 1854, p. 17
- 6) H.-Ch. Monod, La Jeunesse d'Agrippa d'Aubigné, Le Blanc-Hardel, 1884, p. 5
- 7) E. Réaume, Etude historique et littéraire sur Agrippa d'Aubigné, Belin, 1883, p. 8
- 8) たとえば、以下の書にも同様の形容が用いられている。  
E.S.A. Gout, Agrippa d'Aubigné théologien, Macabiau, 1883, p. 7

- S. Rocheblave, Agrippa d'Aubigné, Hachette, 1910, p. 14  
 S. Rocheblave, La vie d'un héros-Agrippa d'Aubigné, Hachette, 1913, p. 21  
 A. Cavens, Agrippa d'Aubigné, Office de Publicité, 1949, p. 4
- 9) *fc.* O.C., t. II, p. 11
  - 10) *Les Tragiques*, v. 1-4, O.C., t. IV, p. 29 なお、以後詩の引用は全て原文による。
  - 11) *cf.* J. Bailbé, Agrippa d'Aubigné-Poète des *Tragiques*, Publication de la Faculté des Lettres et Sciences Humaines de l'Université de Caen, 1968, pp. 291, 436
  - 12) Polybe, *Histoires* (Livre III), texte établi et traduit par J. de Foucault, Les Belles Lettres, 1971, pp. 43-44
  - 13) Tite-Live, *Histoire Romaine*, XXI, in *Histoires Romaines-Tite-Live*, Saluste, traduit par G. Walter, Bibliothèque de la Pléiade, 1968, p. 437
  - 14) ドービニエの『悲愴曲』には神話上、史実上の、およそ270の人名が登場する。ここでは先ずそれを以下の基準で削減した。ドービニエのその人物に対する評価が肯定的であること、即ち<悪>や<偽>に属するものとして扱われていないこと。一体化を呼ぶ程度の存在であること、特にドービニエの気質からして<英雄的>存在であるものを選ぶ。最後に、あやうい基準ではあるが、同時代人ではないこと。同時代人の中にドービニエが好意をよせ、尊敬していた者も決して少なくないが(たとえば, *Seigneur de Saint-Gelais*), ここでは評価が一般に古典的なものとして確立していたものを扱う。一方、ドービニエの誓言伝説は次の要素を含むと考えられる。幼年期伝説, 父子間伝説, 誓言伝説, 復讐伝説がそれである。選択した人物には、それぞれ固有の伝説をもち、且つそれが伝説のいずれかの要素を含むものも少くないが、全ての要素を含むものはハンニバル以外、求めきれなかった。ただ、問題となるのが、史実を時として超越する伝説であるだけに、完全な検討は論者の手に余るものであった。大いなる不備を告白すると共に、御教示を望む次第である。
  - 15) レオン=デュフル編『聖書思想事典』, イェール他訳, 三省堂, 昭和48年の記事による。
  - 16) 聖書からの引用は、1955年改訳の日本聖書協会発行のものによる。
  - 17) G. Dubois, *Les images de parenté dans "les Tragiques"*, in *Europe*, mai 1976, p. 37
  - 18) *Préface du Printemps*, v. 237, (O.C., t. III, p. 11)
  - 19) *ibid.*, v. 122, 285, (pp. 7, 12)
  - 20) *Sonnet LXVII du Printemps*, v. 1-4, (p. 48)
  - 21) *Ode XXXIII du Printemps*, v. 48, 57, 58, 99, (pp. 192-194)

- 22) フロイト『続精神分析入門』古沢平作訳，日本教文社，昭和44年，p. 100 参照。
- 23) フロム「権威と家族」，『権威と家族』安田一郎訳所収，青土社，1977年，p. 17
- 24) ただし，ドービニェ自身は義母の故と告げている。  
cf. O.C., t.I, p. 5
- 25) cf. Montaigne, Essais, in Œuvres complètes, édition par A. Thibaudet, Bibliothèque de la Pléiade, 1962, p. 1079
- 26) cf. O.C., t.I, pp. 10-11
- 27) この間のドービニェの行為は，実のところ，自伝中の以下の，1570年に関わる記述をみる限り，整然としていない。  
“une fiebvre continuë le mit au lit. Cette maladie le changea entierement et le rendit à luy mesmes”  
この回心は持続しなかったのか。
- 28) これは現段階では例証を省き，推測にとどめるが，最初に『悲愴曲』を口述させた際の負傷体験が，ひとつの転回点だったのではないか。  
cf. O.C., t.I, pp. 33-37
- 29) O.C., t.I, p. 4
- 30) Keith Cameron は Agrippa d'Aubigné, Twayne Publishers, 1977, ではっきりと 1626 年を製作年代にあてているが，疑問である。製作が長期に渡ると考える理由は，序文を捧げた Marie が 1625 年に死亡していることから，少なくとも序文及びそれと同時に書き始められた記事がそれ以前に書かれたものであるのは間違いなく，また，自伝の最後の事件は 1629 年のイタリア遠征にかかわるものだからである。
- 31) たとえば，chevalier d'Achon に関する記事と O.E. での註釈，あるいは，Fervacques の記事と同註釈を参照。更に，実のところ，錯誤と思われる点は引用した自伝中のアンボワーズ事件の記事にもみられる。ドービニェははっきりと「8歳半 (A huit ans et demi)」と書いており，彼の誕生が 1552 年 2 月 8 日であることを考えれば，この記事の日付は 1560 年の夏にあたらなければならない。ところがアンボワーズ事件はその年の 3 月に起こり，処刑もその月の終わりまでしか続かなかった筈である。渡辺一夫はこれを和訳して「八歳の頃」(op. cit., p. 406) とするが，浅学にして《A huit ans et demi》が 16 世紀後半から 17 世紀前半の数学表現として精確にそう和訳されるのか否か，不明である。勿論碩学の訳に誤りはなかりうし，古語としての言いまわしで，《et demi》が「～を越えた」との意味になる場合があることも承知している。しかし，少なからぬドービニェ研究者が自身の文中で「彼が 8 歳半に達した時」と書いているのを見る時（たとえば，A. Garnier, Agrippa d'Aubigné

- et le parti protestant, 1928), そうした研究者全てが古語趣味を有しているか、あるいは間違えているか、判断のつきかねるところである。もっとも、この数学表現の、あるいは錯誤が本稿の論にどれほど関連するかは保留したい。錯誤かも知れぬものが、記事の真実性そのものと直結するとは限らないであろう。ともあれ、学いたらぬ者のひとつの疑念として提出しておきたいと思う。
- 32) cf. Batiffol, op. cit., p. 186
- 33) 『悲愴曲』では、勿論この作品の特性もあるが、事件の描写が具体的であり、且つドービニエの体験した以上の事柄に触れている。  
cf. Les Tragiques, Les Fers, v. 327-334, (O.C., t.IV, p. 202)
- 34) cf. O.C., t.I, p. 6
- 35) フロム, op. cit., p. 17
- 36) フロム「宗教体験のある種の型の分析」,『精神分析と宗教』谷口・早坂訳所収, 東京創元社, 昭和46年, p. 47
- 37) ≪良心は自我理想の番人として指定されているが、この自我理想形成を刺戟したものはとりもなおさず声によって媒介された両親の批判的影響であった。この両親に、更に、時がたつにつれて、教育者や教師や、その他、無数かつ漠然たる周囲にいる多数の人々が加わるのであった≫ (フロイト「ナルチシズム入門」,『性欲論』懸田克躬訳所収, 日本教文社, 昭和44年, p. 205)
- 38) 渡辺一夫は、ドービニエ自伝のアンボワーズ陰謀事件の項に、≪幻想詩人のドービニエの記述には勿論誇張はあろう≫と書いている。(渡辺一夫, op. cit., p. 407)